

入選 福岡県 安永 賢治 様 (40代)

私の父は、2018年11月に64歳という年齢で亡くなりました。心筋梗塞で倒れ、病院に運ばれた後、3週間存命しましたが、一度も意識を取り戻すことなくあの世に旅立っていきました。本当に突然のことだったので、途方に暮れたのを今でも覚えています。一度でも目を覚まして会話することが出来たなら。話しかけると、多少の反応はあったものの、会話することはままなりませんでした。死ぬ間際の会話を奪われてしまった私たち家族は、ただ涙を流して棺を見送ることしかできませんでした。余命何年かあって、死ぬ前の準備が出来ていたなら。最後、父は何を楽しみにしていたのだろうか。私が二十歳を過ぎて、大学の下宿先から実家に戻ったときに、そして私が働きだしてからも、一緒にお酒を飲むのを楽しみにしていたようでした。仕事の話、結婚の話、たわいもない話など、そのときはたくさん話をした気がします。でも、倒れる前に一度、飲みに行こうと誘われたのに、仕事の忙しさを理由に断ってしまったこと。今となっては取り返しがつかず、後悔しかありません。

父が亡くなってからは、実家に母一人でぼつんと住むことになりました。父と母で二人で住むはずだった家。家のリフォームも行って、本当に「これから」というときでした。父も退職間近で、母もこれからの父との暮らしを楽しみにしていたことだろうと思います。子供二人は巣立っていったので、これから時間も増え自分たちの余生を謳歌できたはずで。これからの時間があつという間に消えてなくなってしまうました。これからという時に。

突然父がいなくなり、ばたばた遺品を整理し慌ただしい時間が過ぎ去った後、時間ができると母に残っていたのは色あせた、空虚な時間でした。大切な人から切り離された、有り余るほどの時間をたった一人で抱えていても、それが何になるでしょう。ただ、空虚な「流れない時間」がある一方で、現実的な問題が眼前に迫ってきて、突如として「流れだす時間」もある。母の頭の中にいろんなことが渦巻くようになっていったと思います。おそらく父は退職後も少しは働くつもりであったため、そのことも母は考慮していたと思いますが、家計を支えていた父亡きいま、一番の不安要素は経済的な不安だったはずで。

重く、そして強くのしかかっていたのではないか、と思います。

そんな時、父の死後の年金の手続きに行くと、職員の方が遺族年金の話をしてくださいました。父はきちんと年金を納め続けていたこと。だから、遺族年金を受け取ることができると。話を聞きながら、少しずつ不安が和らいでいったのを覚えています。父が働き続け、きちんと厚生年金を納め続けてくれたおかげで、現在母は遺族年金を受給し、生活が出来ます。将来の不安を軽減し、残された母の生活を支えているのは間違いなく遺族年金です。

私たち家族のように、病気によって大切な人が亡くなり、自立した生活がいきなり困難になるケースは誰にでも起こりえます。私もこうしたことが自分と家族の身に降りかかるとは思ってもみませんでした。しかも、こうしたリスクは個人で非常に予想かつ対処しにくく、だからこそリスクヘッジの観点から公的な制度が必要なのです。予測することが難しい将来のリスクによって、その先の人生が壊れないようにするためにも、社会全体で支える意識と、年金制度に対する正しい理解と運用が本当に不可欠だと思います。